

早稲田大学審査学位論文  
博士（人間科学）  
概要書

住まい手とつくり手をつなぐ  
インテリア計画手法の研究開発

Methodology for Housing Interior Planning by  
Collaboration between Customer and Creator

2019年7月

早稲田大学大学院 人間科学研究科  
伊丹 弘美  
ITAMI, Hiromi

研究指導担当教員： 小島 隆矢 教授

現在、注文住宅という人生最大の買い物をめぐって、事前のイメージと異なるというトラブルが増え建築紛争が増加している。注文住宅の取得・建築プロセスは住まい手とつくり手の協働によって行われるが、住まい手の要望や好みについてつくり手がくみ取る過程に問題があり、この問題を解決ないし改善する具体的な手法は確立していないのが現状である。本研究では、つくり手が住まい手の要望を把握し、さらに実現手段検討のための意思疎通を支援することを狙ったインテリア計画手法の獲得を目指して、住要求・インテリア選好診断ツールの開発ならびにインテリア計画品質機能展開表の試作を行った。

第1章では、本研究の概要として、本研究を構成する課題（課題Ⅰ本研究の開発課題設定、課題Ⅱ問題解決の探索、課題Ⅲインテリア計画手法の獲得）と研究（1～5）との関係を明確にした。

第2章前半では、研究の背景（2.2節）として、戦後の家づくりの変遷（2.2.1項）や昨今の家づくり（2.2.2項）と家づくりの流れ（2.2.3項）を述べ、実際の家づくりがどのような流れで行われているかを示した。現状の家づくりプロセスにおけるつくり手側の分業体制に起因する問題について、マーケティングの理論を用いて解決の方向性（2.2.4項）を論じ、建築分野における顧客重視指向について（2.2.5項）述べ、業態別に家づくりプロセスの現状を示した（2.2.6項）。また、つくり手の分業体制が始まり現在に至る経緯を概括（2.2.7項）し、マーケット・インの家づくり（2.2.8項）について述べ、実現するための方法と家づくりの課題（2.3節）を述べた。後半では、本論文の研究構成（2.4節）を示し、第1章で示した研究課題との関係を明確にした。また、研究の目的（2.5節）と本研究で扱う用語（2.6節）について述べた。

第3章では、住宅取得プロセスにおける現状について、住居取得者を対象とした既存の顧客満足度調査（研究1）に基づき、本研究の課題を把握した。

第4章では、第3章で示唆された家づくりプロセスに関する問題点をより詳細な実態・実感とともに把握するために、定性調査（インタビュー調査・研究2）を実施した。第3章および第4章から、家づくりプロセスに起因する「要望把握や意思疎通」，「コミュニケーション齟齬」，「イメージの共有方法」，「設計者とICの役割の明確化」が本研究で検討すべき課題として設定された。

第5章では、第3章および第4章で把握された本研究の課題解決の方法を探索した。要望把握しイメージを共有する際、意思疎通やコミュニケーション齟齬が生じていることから、住まい手とつくり手が使用するインテリア計画における空間を表現する語彙に着目し、両者の印象認知構造や語彙の共通性・差異を明らかにした。両者の認知次元は5次元で構成されており、次元共有度は非常に高く（4次元までほぼ完全に共有、5次元から低下）、語彙の属性傾向（住まい手は情緒的比喩視点、つくり手は空間の属性・性質を認識）が示された。両者が用いる語彙と認知次元について、「共有度の双方が高い次元」、「語彙は異なるが認知次元共有度は高い次元」、「語彙と認知次元共有度の双方が低い次元」の3つに分類した。また、「語彙は異なるが認知次元の共有度が高い次元」については、住まい手とつくり手が使用する語彙を整理して翻訳機能となる語彙変換辞書を開発し、インテリア計画手法の基礎的資料として示した。

第6章では、第5章の基礎的資料を基に、本研究課題を解決するべく、リビングにおける住要求・インテリア選好診断ツール（以下、診断ツール）の開発を行った。この診断ツールは、住まい手のニーズを階層的に捉え、ニーズから好みをタイプ別に診断するもので、住まい手が希望する暮らしへの志向や生活行為、住みたいリビングの特徴と性能、提供情報量の適正などを把握できる。

第7章では、住まい手の住要求およびその実現手段の検討に用いるツールとして、インテリア計画品質機能展開表（以下、インテリア計画 QFD）を試作した。インテリア計画 QFD は、住まい手の住要求に基づく（マーケット・イン）要求品質展開表と建築の設計 DR（デザインレビュー）から要求品質を具体化した品質特性表、それらの関連度を検討した品質表で構成される。初期段階の DR 時に使用することで、複数のつくり手が同じテーブルで検討でき、品質の確保や向上、工程の手戻り削減につながる。

第8章では、第6章の診断ツールと第7章のインテリア計画 QFD をインテリア計画へ利用する意義を述べ、実務利用するための具体的方法について述べた。

第9章では、終章として、本論文の全体構成から総括した（9.2 節）。また、インテリア計画における本研究の成果について述べ（9.3 節）、本研究で開発した住要求・インテリア選好診断ツールおよび試作したインテリア計画品質表について、インテリア計画における可能性と限界（9.4 節）を述べた。最後に、今後の課題について述べた（9.5 節）。